
猫のじょん〇る。

えみばんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫のじよん〇る。

【Nコード】

N1568W

【作者名】

えみばんび

【あらすじ】

じよん〇ると呼ばれる近所の猫のお話。もともと猫好きなこの内田家だが、なぜかこのじよん〇るは憎まれている。

俺は猫だ。人は俺を見ると眉をひそめる。

気の毒なほど可愛くはないらしい。この内田家では何故か「じよん
○る」と呼ばれている。

○に入る字はご想像にお任せする。

俺が内田家に来始めたのは2008年の初め頃だったと思う。

この家が建つて三年程経った頃だ。二階の窓からいつも三匹の猫が
外を恨めしそうに眺めていたっけ。

外には出れないらしい。三匹とも毛が長い。俺は短い虎柄だ。代々
続いているであろう虎猫ってやつだ。

その頃内田さんちには庭に「オッドちゃん！」と呼ばれる白い野良
猫が通い始めていた。どうやら内田さんの母さんはこの辺にはめず
らしい猫好きらしい。この辺は田舎で、農家がほとんどだ。一キロ
先は海だがここは山に囲まれ、電車がすぐそばを通り、のどかとい
い所だ。

内田さんがこの場所に家を建てたのは、そんな環境を気に入ったか
らだそうだ。事前調査もろくにしないからまさか周りに猫嫌いがた
くさんいるなんて想像もしなかった。犬二匹シエルティとゴールド
ン、猫三匹と小学生の男の子、ご主人、母さんでのんびり暮らした
いと願つての事だ。

野良猫オッドはいつも美味しそうな物をもらっていた。俺はみんな
に気づかれないようにオッドの残したご飯を食べていた。朝はドラ
イフード、夕方は缶詰だ。

そのうちオッドは庭の隅で子猫を二匹産んだ。母さんは子猫が乳離
れした頃そいつらを家に入れた。

そしてオッドは避妊手術をされた。内田さんは家の中でオッドも飼

いたかつたらしいが、オッドは家の中には入らなかった。その後も外でご飯をもらっていた。俺はオッドが邪魔だったからいつもやつつけた。母さんはその頃から憎しみを込めて俺の事を「じょん〇る」と呼ぶようになった。慌ててオッドを避妊手術したのも俺が去勢をしていなかっただからだ。初めは俺が野良猫だと思っていたらしい。その頃はたまに見かけても別段冷たくはされなかつた。飼い猫と解った途端冷たくなつた。どうやら、飼い主さんに腹を立てているようだ。

俺はいつも鈴のついた赤い紐を首にかけていた。鈴の音がするとゴールデンレトリバーのデカイ犬、バンビがものすごい勢いで吠えまくつた。母さんは近所迷惑だし、俺にとつても紐が苦しいのでは、と

鈴と紐をはずした。でも次の日俺は新しい鈴を付けて来る。俺がどこかで飼われている、と気づいたのだ。母さんは去勢もしていない猫を外飼いするなんて！うちの大事なオッドをいじめるな！・・・と俺に相当頭にきていたのだ。母さんは次の日も鈴と紐を捨てた。しかしまた違う鈴をつけてもらった。また母さんは外した。でも俺の飼い主さんはまた付けてくれる。その繰り返しだ。結局、五個は捨てられた。母さんも意地になつていた。「いったいどんな人が飼っているのだろう？」母さんは考えていた。

いつもおれは怪我をしている。ひどいケガをした時に母さんは俺の首輪に手紙を結んだ。

内容は「飼い主さん、怪我がひどいので病院へ行つてあげてください。ついでに去勢をしてください。」

この辺は野良猫が多く、ますます増えてしまいます。」と。俺の飼い主さんがこの手紙を読んだかどうかは知らない。はつきり言つて読んだとしても大きなお世話だと思つたに違いない。その後去勢はされてない。ケガをすると赤チンをたくさん塗られるよ

うになった。母さんは毎回付け替えてくる紐と鈴の汚さ、古さ、今時赤チン（ヨードチンキ）。母さんの幼い頃は赤チンがあつたらしいが最近はマキロンだ。この事から俺の飼い主さんは「年寄り」と予想をたてた。

母さんも家猫三匹にオッドの子供二匹の世話で大変そうだ。だから俺はいつもオッドをやっつけてこの家から出て行ってもらった。その後さらに俺に対する風当たりは強くなった。俺を見ると「じよん〇るっあっち行って！オッドちゃんを返せっ」ってね。毎日毎日母さんはオッドを探していたな。

でももうオッドは戻ってこなかった。母さん、ものすごく落ち込んでいたよ。だから、しばらくしてから新入りを連れて来てやった。こいつが気ぐらいが高く、かわい気がなかった。でも母さんはお腹をすかしたそいつにご飯をあげていた。

内田さんちには「ひろ子さくん」という獣医さんがよく来る。母さんの友達だそうだ。友達の少ない母さんには貴重だ。この「ひろ子さくん」は母さんたちよりずっと前からこの土地に住んでいた。だから人脈もあり、情報通だ。いつも俺を見ていきなりゲラゲラ大笑いする。俺は虎猫といつてもかなり個性的な容姿らしい。母さんが俺を「じよん〇る」と呼んでいるのを知ると、さらにウケまくっていた。

俺の憎たらしい行動と容姿にぴったりだ、と言うのだ。そして知り合いにこの話を広めた。その甲斐あって俺の身元がわれた。本名もバレた。もともと俺はこの辺では知られていた。「テリトリーが広すぎる猫」として。俺は内田さんちの近所の魚の加工工場で飼われている。・・・というか餌をもらっている。

土日はそこが休みで人が来ないから内田家に通った。その頃は土日の男、とか言われた。ちよつとかっこいい。そこで働くおじいさんやおばあさん達に「みい」という名前で呼ばれていた。この事がわかると母さんもひろこさんもまたゲラゲラ笑い続けた。俺が「みい」

と呼ばれている事が相当おかしい事らしい。
でも、二人は相変わらず「じょん〇る」と呼ぶ。ケガをして赤チンだらけの真つ赤な俺の姿を見てさらに笑う。赤チンの話を聞いた人が「きつとむかしの赤チンを引き出しの奥からひっぱり出したのね」と笑う。ゲラゲラ笑ってばかりのひろ子さんだが、母さんは「あなたの傷が化膿しないのはひろ子先生が抗生物質の薬を持って来てくれるからよ！感謝しなさい！」と言う。

新入りの野良猫は「シルビア」と呼ばれるようになった。

前の「オッド」は目の色が黄色と青のオッドアイだから。こんどのシルビアは毛の色がグレーの虎柄でシルバーから「シルビア」。なんだか俺と名付け方が違う気がする。シルビアが飼い猫ではない事がほぼ確定するとすぐ、避妊手術をされた。母さんは「ごめんね」とシルビアに言った。

「じょん〇るさえいなければね」とも言った。避妊手術をしてからシルビアは少しおとなしくなって俺と行動を共にするようになった。しかし、あんなによくしてくれる

母さんには懐いていない。俺のほうが母さんにべたべたが上手い。ベタベタスリスリをすると母さんは「やめて〜！」ってまだ俺を嫌っている。そして、必ず手を消毒しまくる。

懐かないシルビアには「シルビアちゃん。。怪我しないでね。」などと甘やかしている。

最近俺はこの近所でも更に有名になってきた。夕方内田家の庭で夕涼みをシルビアとしてみると、犬の散歩やウォーキングの人達が立ち止まり、「すごい猫ですね〜うちの犬の事恐がらないんですよ〜顔もすごいですけど、神経もすごいのね」と俺の事を話し、「あつちのきれいな猫ちゃんの種類はなんですか？」とシルビアの事を話す。母さんは首が取れそうなくらい左右に振り「違います。違います。あの

汚いほうはよその飼い猫です。うちのはグレーのきれいなほうの猫です。」「ってきっぱり言うんだ。

何もそこまで否定しなくても・・・って思うよ。俺がこの家の猫って誤解されるのが相当嫌らしいよ。

それから、俺は犬なんて怖くない。横を通っても平気だ。特に内田家のサハラとか呼ばれているシエルティはボケ始めた老犬だし、バズビとかいうバカデカイ犬は去年天国行っちゃったし、楽勝だ。

だから内田家は大変居心地がいいのだ。

しかし、最近内田家の庭によそ者猫が来始めた。そして近所からも母さんに苦情が来るようになった。

ところで、これまで登場していない内田家のご主人について話そうと思う。

お父さんはまじめな人のようだ。仕事も帰りが夜遅くて大変そうだ。こうして母さんが野良猫の手術をしたり、病院へ連れて行けるのも物静かなお父さんのおかげだ。お父さんはせつせと仕事をし、稼いだお金は野良猫に使われる。しかし、文句一つ言わない。ほんとに優しい人なのだろう。

いつかも夜遅く帰ってきたお父さんは俺の頭を撫でながら「じよんくん、パトロールご苦労さま」って。俺はあんたこそお勤めご苦労様、って言いたい。

ある時はお父さんが母さんに「じよん〇る、って呼ぶのやめない？せめてジヨンにしない？」って話してた。あつさり却下された。決力はないらしい。でもほんとにやさしい人だ。

最近のよそ者だけど、オス猫で傷だらけで、でかい、それも二匹だ。母さんはひろこさんに「どーも、じよん〇るが回覧版でも回してんのかな？内田家最高」って。最近また野良猫が出没するんです。なぜこの辺には野良猫が多いのでしょうか？」「ってね。そこで、母さんとひろこさんの考えはこうだ。

この近くに斎場がある。そこには野良猫が数十匹いる。距離は一キロくらいだがどうやらお腹をすかした奴らがこっちまでくるのでは？ 実際内田さんが家を建てる前に土地を探しに来た時も猫を拾っている。しかも妊娠していた。子供達は時期がくると「増えると大変だ」とすぐ手術をされて家の中で飼われている。おかげで引越して来て七年で現在は家の中に9匹、外猫が二匹になってしまった。引越した当初は海外旅行なんかも行っていた内田家だが、最近はめっきり出かけなくなった。猫貧乏だ。でも、世の中には30匹保護して面倒を見てる、なんてすごい人もいる。好きだけじゃできない。猫好きには尊敬されてもたいがいは変人扱いだ。

俺は最近来出したそいつらと毎晩戦っている。ここん家は俺が先に見つけた俺の場所。シルビア以外は立ち入り禁止だ。だから毎晩戦って俺も傷だらけだ。だけど、戦っているところを母さんに見つかる何故か俺を母さんは怒鳴る。いいとこしてるのにおかしいと思う。母さんは相手の野良があまりに傷がひどいから可哀そうに思うようだ。ここでご飯を食べないとそいつらはよその家に入り込んでしまうようだ。

近所の人に「お宅の猫じゃない？ 飼い方気をつけて！」と言われた。もちろん否定した。

困った母さんは野良猫ボランティアに相談した。ボランティアの人は自分達が責任を持つから餌をやって他で悪さしないようにしてくれ、と言った。なついてきたら保護する、というのだ。だから母さんはご飯をそいつらにあげたいようだ。でも、俺がいるからそいつらも以前のようには来れなくなった。母さんは今もそいつらが気になっているようだ。人がいいにも程がある。近所の人にもっと嫌われちゃうのに。

母さんが幼い頃住んでいた田舎には誰が飼い主でもない、いわゆる地域猫がたくさんいた。最近は何せこんなに猫は嫌われているのだろうか？ 飼い主に大きな理由がありそうだと俺が言うのもなんだが、

そう思う。

さて、陽が暮れてきた、今日もパトロールに出発だ。

(後書き)

実際に起こっている事を何かの形で残したく、文才もないが書いています。

読みづらくて申し訳なく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568w/>

猫のじょん〇る。

2011年10月9日14時19分発行